

■研究十二月往来(37)

狂言(木六駄)三題

—雪・喜三太・鶉舞—

田口和夫

雪の無い(木六駄)

雪の狂言と言え(木六駄)である。ところが江戸初期の台本には雪の描写は無かった。この事に気付いた時、まさかと思つて諸台本を読み直した事だった。今は、大雪の峠道を太郎冠者が牛の列を追つて登る。(木六駄)前半のこの場面は、一本の鞭で十二疋の牛を舞台に描き出す、難しい演技が必要となり、何匹の牛が見えるなどと評されることもあった。近代の名人たちも皆この曲を得意としていた。週刊朝日百科の「週刊人間国宝」65は善竹弥五郎・六世野村万蔵・三世茂山千作・九世三宅藤九郎・四世茂山千作・初世野村萬の諸師を特集しており、わたしも六世万蔵を担当しているが、その六人のうち、茂山家の二人を除く四人まで、期せずして(木六駄)の写真を載せている程である。雪の載つた太郎冠者の笠は大雪を視覚化して風情があるが、同じ雪の笠でも能(葛城)の女神のそれとは打つ

て変わつて、苦しい労働の姿である。この雪の印象を強調するために、各流の現在の台本には様々の工夫が見られる。和泉流野村家では、太郎冠者を待ち受ける茶屋に、空から雪が「真つ黒になつて降る」と言わせる。大蔵流茂山家でも「今日は思ひも寄らぬ大雪」と言わせている。大蔵流山本家では牛が「木六駄」しか居ないなど全体の設定が異なるが、茶屋が「はや、したたかに降つて参つた」と言い、冠者は吹雪に転ばされる演技までする。雪が現在の主要な要素と言つてもよいのである。だが、江戸時代初期の(木六駄)には、その雪が無かつた。

これは和泉流の狂言であつた。和泉流では江戸初期の天理本、次の和泉家古本以来、各時代の台本が存在している。大蔵流・鷺流では江戸初・中期の台本は無く、名寄にも江戸後期になつて初めて見えるだけである。従つて、形成初期の姿は和泉流の台本によつて見

ることになる。

この狂言の研究は橋本朝生氏「(木六駄)の形成と展開」『狂言の形成と展開』平8、初出『能研究と評論』昭49・1)に尽くされている。各流の台本を網羅した行き届いた論文であつて、屋上屋を架する必要はないと思わされたものであつた。その論に、「天理本によつてその筋立てを簡単に追つておこう」として梗概を書き、その中に「太郎冠者は大雪を理由に渋るが……中入りの後が冒頭にあげた雪中の牛追いである」とある。これは明らかに誤りであつて、天理本にはこの雪に関する描写は一言も無い。橋本氏が誤つた原因は確認可能である。該論の初稿と言うべき論『狂言研究創刊準備号』昭47・5)があり、そこで橋本氏は大雪の描写がある「古典文庫本『狂言六義』」によつて梗概を記された。それを次稿で部分的に修正しながら、雪のことを削除せず該論に流用されたのである。以降、天理本の翻刻作業も含めて、私には何度か(木六駄)に触れる機会がありながら「雪の描写が無い」ことを見逃していた。初めてそれに気付いたのは、平成30年5月能楽学会大会において小林千草氏が「和泉流幕末台本『木六駄』の性格と表現性」と題する発表をされることになり、念のために和泉流の各時代の台本を再確認しておこうとした時である。天理本(正保三頃

1649)、和泉家古本(元禄六1693以前)に雪の描写は無く、波形本(天明六1786)に至って大きく変わり、冒頭から天理本にはない大雪を強調したセリフが続く。最初に、伯父から便りがないことを心配する主に対して太郎冠者が言う「此間はおびただ敷雪でござるによつて其様の事でかなござりませう。ちと雪もはれましたらばお便りがござりませう」を始めとして、使いを断るせりふにも、「此の大雪にみすがらさへ心元なふござるに、拾式正の牛をおふてなんとまいられませう」と言う。これは古典文庫本に継承されるが、現行和泉流野村家の台本では、この段での雪の描写は無いので、この大雪の趣向は江戸中期に和泉流宗家系で工夫されたものと推測されるのである。

#### 「木六駄」という名

炭六駄だけを引いてきた太郎冠者に対して都の伯父は、主の文には「木六駄、炭六駄」とあるが「木六駄」が見えぬと不審する。太郎冠者は「筆者の誤り」(能(俊寛)にある)と言い、「此ほどおれが名がかわって木六駄と云いよつて、木六駄に、すみ六駄まいらせ候」と答えると伯父は「おもしろう名がかわつた」と納得してしまふ。これは天理本によって記したが、諸本同じ趣旨で、伯父がこれ以降答める事はない。何故「キロクダ」が人の名とし

て納得されるのか、私は源義経の一代記「義経記」で、義経の馬引きであった「喜三太(キサンダ)」を念頭においた秀句(言葉のしゃれ)だったと考える。喜三太は巻四「堀河夜討」の場で、土佐坊の軍勢に対して独りで立ち向かい、弓・長刀で勇戦し、弁慶が駆けつけるまでを支えた忠義の下人である。彼は巻八の衣川合戦、義経の最後の場面まで付き従つて戦い、討死している。忠義の下人、馬引きの「キサンダ」のパロディが、忠義とは程遠い下人、牛追いの「キロクダ」という訳である。これは平成二十八年「あぜくらの夕べ」で野村萬・山本東次郎両師が(木六駄)をテーマに対談されたときに話したことである。

#### 〈鶺鴒舞〉のハコ

その対談で、東次郎師がお父上のお話として、九世三宅藤九郎が三世茂山千作から(鶺鴒舞)を教わっていたということを紹介された。藤九郎が野村家の(木六駄)に鶺鴒の鶺鴒舞を導入したということは『能楽大事典』にも記される周知の事と思つていたが、これは新情報であった。平成三十年十月十三日、国立能楽堂の解説で三浦裕子氏が『謡曲界』昭和五年十月号に、西村紫明が野村万介(藤九郎)に鶺鴒の鶺鴒舞をリクエストし、同じ十月のよいや会において万介が試演したとの情報を紹介された。これに導かれて『謡曲界』を確認すると、同誌

十一月号に万介の「鶺鴒とうずら舞」という一文があり、同年七月に鶺鴒其角堂機一の鶺鴒舞を見したこと、それは「動きの少ない、ほとんど小手先丈で写実的なもの」であったと言う。また、それ以前に鶺鴒の役者日吉市之助の酔余の鶺鴒舞を見たこともあると記している。紫明のリクエスト以前から万介は鶺鴒の鶺鴒舞に関心を持っていたことになるが、実際に万介が演じたのは十月十八日のことで、それは狂言の中のものではなく独立した小舞として、「試演うづら舞」と記録されている。

#### 大蔵流茂山家の(鶺鴒舞)

茂山家の現行台本は旧日本古典文学全集『狂言集』に北川忠彦氏の校注で収録されている。そこで(鶺鴒舞)は小舞として虎明本に本文・天正狂言本に曲名のみ見えることが注される。狂言の世界では本狂言の(木六駄)より古く、独立して演じられていたものであることが分かる。虎明本の本文は茂山家のものより相当に簡単だが、鶺鴒が一羽で、捉えてみれば「こきやろう」(鶺鴒の鳴き声)と鳴くという大筋は共通であり、鶺鴒(日本古典全書、中)のものとは相当に違う。藤九郎は鶺鴒の崩れた小手先芸ではなく、酔態の中ですっかり狂言の型になっているという呼吸を習いたかったのである。(文教大学名誉教授)